

二合半用水物語

木村 千ヨ著



三郷民報社

木村チヨ著 二合半用水ものがたり

第1刷 1997年5月10日

発行者 三郷民報社

三郷市戸ヶ崎1-86 ☎0489-52-4864

印刷所 埼新印刷株式会社

浦和市別所1-3-18 ☎048-861-7511

木村 千ヨ著

二合半用水物語

三郷の発展に大きな貢献

土屋 義彦

木村チヨさんには、私の叔父である上原の代から、家族ぐるみでお世話になっており、大変感謝しております。

木村さんは、女手一つで二人のお子さんを立派に育てられ、幾多のご苦労があつたことと思いますが、その様なそぶりはついぞ見せられず、記者として、また発行人として西へ東へ奔走し、御活躍されていらつしやいます。

米寿を迎えられた今も、なお第一線でご活躍され、私も見習いたいものと、常々その御姿を拝見しております。

記者としては、頑固一徹、正に竹を割つたような性格で、周囲をいつもハラハラさせ、また越後女の暖かさ、粘り強さで人を魅了し、その活動は三郷に木村ありといった観です。

三郷民報を約二〇年の長きにわたり発行されるとともに、県人会づくりや郷土の交流活動、三郷土着の文化掘り起しや新しい文化活動の創造、そしてまた短歌集を発行されたり、油絵を描かれるなど、まさに八面六臂の活躍であり、三郷の発展への貢献は文章では表せないものがあります。

チヨさん、『二合半用水ものがたり』の出版、本当におめでとうございます。

これからも三郷民報を楽しみにしていますので、益々の御活躍を期待しております。

お祝いのうた

三ッ林弥太郎

三郷民報の木村様には、三郷市に移り住まれて四五年を数えられ、その間、三郷市の政治、経済、文化の発展、県人会の交流等、新聞を通して、大きく貢献されてまいりました。多くの方々との出会いを大切にし、常に前向きで現在を生き、自らの信念を忠実に実現してゆくバイタリティには感服のほかありません。

人生は後半の方が内容も複雑となり、喜びもより多く、悲しみもより深くなります。人はそれぞれ自らのからだで一つのドラマを演じているのであり、故に「人生は芸術」であります。

多くの人々に支えられ、たゆまぬ前進を続け、今日を有意義に、自己のベストを尽くしてこられた木村様が、さまざまな経験をふまえて、最近の二〇年の歩みを刊行されますことは、人生の先輩として、後輩のよき指針となることと思います。

記念誌の御出版と木村様の益々の御長寿をお祈り申し上げましてお祝いのことばといたします。

地方自治育成に実績

今井 宏

三郷民報代表の木村チヨさんが、今回三冊目の著書である『二合半用水ものがたり』を出版されると伺い、そのご健筆ぶりに心からの拍手をお送りいたします。

木村さんが、三郷市において、地元有志の皆さんの協力の下に地域に根ざしたミニコミ紙『三郷民報』を発行されて二〇年の歳月がたちました。

いま政治改革が叫ばれるなかで、その中心課題である「地方分権を柱とした地方自治の確立」に向けての取り組みがなされております。私も三郷市と隣り合わせの草加市で、長年にわたって首長を務め地方自治に取り組んで参りました。木村さんがこれまでに果たして来られた、地方自治の育成や市民の中から育くまれるコミュニケーションづくりの実績に心から敬意を表しております。

木村さんのこの『二合半用水ものがたり』を地域社会からの声として、心から推薦いたします。

出版に寄せて

武山百合子

木村さんと私との関わりは、九三年の衆議院選挙に私が出馬・当選してから数年と短いのですが、色々な会合に招かれ出席する度に感じることは、木村さんが人の和を大切にしていることです。

いまの日本は、行財政改革・規制緩和・年金をはじめ医療・福祉問題等、社会保障制度の安定を求めるなど、さまざまな問題が山積しています。

二一世紀に平和と豊かな日本を維持するために思い切った改革が必要で、す。また、明治以来の中央集権体制を地方分権へ「効率的で小さな政府」を実現することによって、成し遂げられるのです。

今こそ政治家のリーダーシップが求められているのです。しかし、私一人ではどうにもなりません。一人でも多くの方々に政治に参加していただくこと、そして木村チヨさんのような経験豊かな方の助言が必要なのです。

その木村さんが、この度『二合半用水ものがたり』を出版されるにあたり、その気概に心より敬意を表しますとともに、今後ますますお元気での活躍をお祈り申し上げます。

一層の活躍を

青木 正久

木村チヨ様がこのたびすばらしいご本を出版され、心からお喜び申し上げます。私も木村様には長い間お世話になりました。おつき合いを通して感じたことは

①社会奉仕を信念として貫いていること

②「私利私欲」というものは全くない

③とくに政治の刷新に一生を捧げていること

ということです。政界だけでなく、いまの日本は経済も社会も下降線を辿っています。司馬遼太郎さんがなくなる前、「日本は静かに衰退してゆく」と嘆いていましたが、まさにその通りです。しかし日本は、そして郷土は、あくまでも前進しなければなりません。「衰退」を「前進」にギアチェンジするため、木村様、さらに一段のご努力をしていただだけませんでしょうか。この本の出版はそのよい機会になると確信しております。

おめでとうございました。

四五年の思い凝縮

しのだ進

三郷民報主幹である木村チヨ女史は、四五年前に三郷に移住して以来、三郷の行政のあり方あるいは県人会のまとめ役として活躍をしてきた人である。その木村女史と私が十数年前に知り合った時、勝気の強い、人の話を聞く人ではないと見うけられた。そんな印象の強かった人が身近に付き合ってみると、氣持の優しい、人の痛みのわかる人間だと感じた。

その木村女史が、四五十年間の思い出をこめて『二合半用水ものがたり』を出版すると聞いて、今年八十八歳の誕生日を迎えた木村女史がペンを持ち綴るということとは素晴らしいことだと思う。一人でも多くの人に購読していただきたいものである。

発刊に寄せて

堀切定夫

このたび『二合半用水ものがたり』が発刊されますことは、この用水も現在改修整備されており、そのタイミングの点、誠に時宜をえたものと思います。

思っておくと、三郷民報主幹の木村さんとの出合いは、私が当時教育委員会で社会教育主事をしておった時、文化祭に出品する油絵を五点程持参してきたのがきっかけで、以降毎年展示されてきた。

いろいろ話をしてみると、文学的にも、政治学的にも、話題が豊富であり、この人は一体どんな経歴の持主なのかと思つたことがあつた。また教育委員会主催の学級、講座にも参加し、熱心な学習力も人一倍有しており、リーダー的要素も心のどこかに存在していたものと思う。

こんなエピソードもあつた。戸ヶ崎での学習活動の時、故白石市長、故堀切六蔵議員、故大山喜代次議員等をはじめ三二名での座談会で私が司会を担当していたとき、白石市長が堀切六蔵議員に「この女は『ただの女』ではない。ネクタイをしめてこい」といつて笑わせていたこともあつた。当時は教育委員会から各地域の公民館、集会所へ行つての出前活動が盛んな頃でもあつた。

その後、地方のマスコミ紙として『三郷民報』を定期的・継続的に発行し、今日まで社会の動向、地域情報その他親しまれる地方紙として、時には問題提起を行うなどめざましい活躍をなされている。頭脳的感覺は計り知れないものがうかがえる。

私は、木村さんを見ていて、人間は幾つになっても頭脳的感覺、色彩を持つ、知的作用を動力化する、この連動的作用をいかに活用するかによって、その人の人間的価値が定まるものと常に痛感している。これからますます高齢化社会に進んでくる。私も木村さんに見習って、いつまでも明るい人生観、いつまでも若々しく、そして知的感觉を退化させず、豊かな人間性を維持してゆくよう今後とも努力していきたい。

発刊を心から祝福いたします。

次回作が楽しみ

岡庭 明

最初の書出し、なんて書くんだらう。おめでとうかな、それとも本が売れてからおめでとうと言うのかな？

明治生まれの越後女、三郷に居を構えて四十数年とのこと。米寿の記念に『二合半用水ものがたり』を出版。その本に何かを書けと言われても、素人の私には本の中味が上手か下手かわからないが、越後女に天晴れと言わざるをえない。というのも、私は先祖代々この地に住んでいるが、越後女に三郷の歴史『二合半用水ものがたり』を書かれてしまったのだから。

現在まで『三郷民報』二〇〇号を発刊し、誰もが認める地域のご意見番のこの本は、規則正しく学習し、実践し、個人的な大筋を書いてある立派な内容であり、敬意を表している。老いや老化は肉体より精神であると強調する木村チヨ主幹、白寿まで頑固一徹、次回作を楽しみにしております。

大（ひろ）き川の流れに

梅谷 薫

矜持（きょうじ）を持った生き方というものがある。

ピンと背筋を伸ばして端座しているような潔さが、この人の生き方には感じられる。それが、会津藩士の娘だったというお母さんから引き継いだものなのか、あるいは両親の離別、再婚といった人生の波の中から身につけたものなのか、私にはわからない。

自分がこうと信じたなら、岩を打つ波のごとく、すべての力を投入して障害を押し流すような激しさと、形にとらわれぬ水のごとく、誰に対しても無防備に自分をさらけ出す童女のような天衣無縫さが同居していて、それがこの人のこわさでもあり、おもしろさでもある。

二年前の誕生日に、歌でも歌ってくれといわれて、一曲作ってみた。歌詞を書くために、彼女の詩集を何度も読み返したのだが、短歌にしても絵にしても、形式や技巧を超えた感情の豊かさがあふれていて、私の心の深い部分に流れ込んでくるような気がした。中でも、川を題材にとった作品は印象的であった。越後を流れる信濃川から、三郷の地を流れる中川へ。川を女の人

生行路にたとえ、木村千代という女性の生き方にたとえた歌「川面に寄す」はこうして生まれた。

「川の流れのように、人生を表現するのはやさしいんだよ。」と本人は言う。しかし、子どもを連れての自殺も考えたという人生の急流は、もはやこの人の穏やかな笑顔からうかがえない。議員さんたちに囲まれて「先生、先生」と呼ばれようと、花見の席で知り合いのおじさんから「おい、ばあさん」と声をかけられようと、屈託のない笑顔で「あいよ」と応じているお千代さんの姿が私は好きだ。

二郷半用水は、私の知る限り町中を蛇行して流れる細々とした川である。しかし、そこに渦巻いてきた人々の喜怒哀楽の歴史を、人生の織りなす綾を、淡々とした筆遣いでこの物語は描き出している。用水のやがて流れ着く先、悠々とした大河の趣をこの本から感じずにはいられないのである。

二合半用水ものがたり★ 目次

三郷の発展に大きな貢献……………	土屋 義彦…3
お祝いのことば……………	三ッ林弥太郎…5
地方自治育成に実績……………	今 井 宏…6
出版に寄せて……………	武山 百合子…7
一層のご活躍を……………	青木 正久…8
四五年の思い凝縮……………	しのだ 進…9
発刊に寄せて……………	堀切 定夫…10
次回作が楽しみ……………	岡庭 明…12
大きな川の流れに……………	梅谷 薫…13
『自由新報』から『三郷民報』発行まで……………	17
『自由新報』支局長として／19 『三郷民報』の発行へ／21	蛇屋
敷のお嬢さん／24 記事の書き方教えてくれた事件／25	
二合半用水の写す歴史……………	29
水とたたかい新田開く／30 旧家の人々たち／31	
県人会の結成と郷土との交流……………	33